関西自然保護機構会報 19(1)：1－2，1997

巻頭言

再び，大台ケ原のトウヒ林保全の現場から

― 早急にニホンジカの個体数調節を ―

三重大学生物資源学部　武　田　明　正

恐れていた事態が近づいている。大台ケ原の森林が崩壊しようとしている。主峰の日出ケ岳を始めとして，正木嶺，巴岳などにはトウヒ，ウラジロモミ，コメツガ，ヒノキなどの常緑針葉樹類を優占種とする森林が成立しており，擬亜高山帯景観の中核を担っている。この森林の一部で，かつて正木嶺の頂上付近を覆っていたトウヒ－蘚苔型の林分が壊滅状態になった。

「著しい獣害を受け，林冠構成木の立枯れが目立ってきた」として，景観保持の目的で，環境庁自然保護局・吉野熊野国立公園管理事務所（現在，近畿地区国立公園・野生生物事務所）が森林植生の保全対策事業に手を付けたのは，昭和61年（1986）であった。その後，10年の歳月が流れた。この間，特定自然環境地域保全管理報告書（日本野生生物研究センター，1985）の提言にそって，植生復元のためにトウヒの更新を促す処置と実生苗の養成，補植などが試みられ，同時にニホンジカの摂食を防ぐため，防鹿柵によるトウヒ林の囲い込みと，単木を対象とした食害防止網の張付が行われてきた。その結果，苔鑑賞路周辺の林分では，防鹿柵内でイトスゲの群落が回復し，高木・低木類の後継稚樹が多数みられるようになった。しっかりとした防鹿柵の設置は，それなりの成果を挙げている。

だが，正木嶺のトウヒ純林の崩壊は止まっていない。ニホンジカの食害を受け腐朽菌に侵された幹は，脆く折れやすくなっているうえ，加害されたトウヒは樹勢が衰え，根系の支持力も低下しているらしい。この場所が風衝地であることと相まって，幹折れ，根返りするものが多くみられる。ただ，この付近に生育するトウヒの樹齢で，200年以上に達するものは知られておらず，この林分は比較的短期間で更新を繰り返しているらしい。本林分の保続にとって，林冠木が枯死・倒伏すること自体は大きな問題ではない。通常，この種の林分では，林床に後継の稚・幼樹が多数準備されているからである。ところが正木嶺のトウヒ林の場合，「更新の鍵」である後継樹がほとんどみられない。

この林分にも防鹿柵が設置されてはいるが，しばしば倒木によって破壊され，ニホンジカの侵入を許している。このため，林床に形成されかけた稚樹バンクや活着した補植苗が食害を受け，後継樹がほとんど育っていない。このことは，保全事業にたずさわる者に，「賽の河原の亡者」のような無力感を味わせている。しかし，この10年間にわたるトウヒ林保全の現場から得た教訓は，時間はかかるがニホンジカの摂食圧を低く抑えれば，トウヒ林の復元・保続は十分に可能であるということである。

トウヒ林保全対策事業は，当初から矛盾を抱えている。トウヒ林に加害する動物（ニホンジカ）も保全対象として位置づけているからである。平方キロあたり数頭の密度が正常値と考えられているニホンジカの数が，大台ケ原の正木嶺付近で，平方キロ当たり30頭を越えるまでに増加している。このことが大台ケ原の森林植生衰退の原因である。防鹿柵とシカの個体数管理によって保全されてい

る南ドイツの自然保護区の事例からみても，大台ケ原の森林植生を保全するには，早急にニホンジカの個体数管理を実施する以外に手だてはない。

ニホンジカの個体数が減っても，トガリネズミの棲み家であるトウヒ林が保全できれば，生物多様性保全上意味がある。